

年 組 名前：



山中湖のシンボルとして親しまれているハクチョウ 山中湖村内



「ハクチョウのおじさん」として親しまれた羽田三二さん(2018年に94歳で死去)は、山中湖に生息するコブハクチョウの保護活動に取り組んだ。観光客や村の子どもたちに生態を解説しながら、山中湖のシンボル(村観光課)を支え続けた。

村のハクチョウは1968年、湖畔にある別荘の住人が共同出資で6羽を迎えたことからスタート。同村出身の羽田さんは山中湖で保養所管理人と

ハクチョウ保護に尽力・羽田三二さん 観光客、子どもに生態解説

して働く傍ら、80年ごろからハクチョウの餌やりを始めた。毎朝5時ごろには軽トラックで湖畔を一周。夕食前も湖畔に向かい、世話をするのが日課だった。羽田さんに気付いたハクチョウは湖のどこにいても集まってきた。

88年からは村公認のボランティアとして積極的に保護活動を開始した。菓子の材料となるアシを準備したり、集作りする小屋を建てたりした。湖畔を歩き、ハクチョウが飲み込む恐れがある釣り糸やルアーを回収。長女の真弓さん(77)は「拾ったルアーが釣りの道具箱二つにはばんばんにたまった」と話す。

冬にはトレッドマークだった、耳当ての付いた帽子をかぶり湖畔を訪れた観光客にハクチョウについて解説。自身が撮影したハクチョウや山中湖の写真も配った。観光客との交流も多く、「今も出会った人から年賀状が届く」(真弓さん)という。

給食のパンの余りを餌として分けてもらったことをきっかけに村内の小中学校にも招かれ、児童や生徒にハクチョウの生態を解説。生息しやすい環境の大切さについて伝えた。

真弓さんは「父はよく孫のようにかわいいと言っていたと懐かしむ。ハクチョウは現在、約50羽に増え、山中湖の風景に欠かせない存在として訪れる人を楽しませ続けている。」(武田寛明)

(2024年4月19日付 山梨日日新聞 16面)

問1 94歳で亡くなられた羽田三二さんは、「ハクチョウのおじさん」として親しまれていました。羽田さんは、どのような活動をされておりましたか。

.....

問2 山中湖のハクチョウは、1968年になん羽を迎えて、現在はなん羽になりましたか。

・.....羽から、約.....羽になった

問3 村内の小中学校で、児童や生徒にどのような話をされましたか。

.....

問4 羽田さんは、どのような思いで、この活動をしていたと、あなたは考えますか。

.....